

古代アメリカ学会第9回東日本部会研究懇談会

〔研究懇談会概要〕

「メキシコ中央部の後古典期：歴史記録の再検討」と題した今回の研究懇談会では、メキシコのアステカとミシュテカの後古典期から植民地期に関する研究が発表されます。いずれの研究も、メソアメリカに特徴的な歴史記録を分析対象として深く絞り込んだ論考です。さらにコメンテーターを迎え、議論を深めたいと思います。また学会員の枠を超えて専門家を招き、発展的な議論の機会にしたいと思います。是非この機会にふるってご参加ください。

〔日時〕 2018年7月7日（土）

- ・開会あいさつ 14:00
- ・発表1：14:05～14:50
- ・コメントおよび質疑応答 30分
- ・小休憩（15分）
- ・発表2：15:35～16:20
- ・コメントおよび質疑応答 30分（17:00 ごろ終了予定）

発表1 「民族史の記録とその意味ーアステカの事例を中心にしてー」

【発表者】 井関 睦美（明治大学）

【コメンテーター】 大越 翼（京都外国語大学）

【概要】

先スペイン期のメソアメリカ諸文化において、王朝史、戦争での勝利、自然災害などの民族史はさまざまな方法で記録され共有された。その記録法は各都市、各王朝レベルで差異があり、その時々の支配層の世界観を表象していると考えられる。記録媒体としては石版、石碑、石造記念碑、壁画、絵文書などがあり、それぞれの表現法や設置場所により、果たす機能や意味は異なっていたと推測される。本発表では、後古典期後期にメキシコ盆地を中心に支配領域を拡大させたアステカ王国（後 1428-1521 年）の民族史に関連する石造記念碑や絵文書を分析し、王国拡大期のアステカ特有の世界観を考察する。その際比較対象として、メソアメリカ文化圏において先行する文化の中でも民族史記録に顕著な特徴をもつ、古典期後期マヤのヤシュチランや中央高原のカカシュトラといった都市遺跡の事例を取り上げ、表現法や記録媒体の活用法の多様性について議論する。

発表2 「メソアメリカ先スペイン期絵文書の研究方法の再検討～オアハカ州ミシュテカのウィーン絵文書を中心に～」

【発表者】 柳澤 佐永子（元メキシコ国立自治大学美学研究所研究員）

【コメンテーター】 岡田 裕成（大阪大学）

【概要】

絵文書はメソアメリカ研究において重要な資料であるが、現存する先スペイン期作成の絵文書で、発掘調査で発見されたものはない。作成年代、作成地、作成民族はその様式と内容により特定されているが、絵文書に記録されている内容の時間枠と作成年代が混同される傾向にある。また、様式分析においては、方法論が確立されておらず、主観的な現代の美術的価値基準に基づく研究が大半を占めている。それは、これまでの絵文書研究は、内容や絵文字の解釈に重点を置いているためであると思われる。本発表では、オアハカ州ミシュテカ地方で後古典期後期に作成されたとされるウィーン絵文書を事例として、従来の先スペイン期の絵文書研究の方法の問題を明らかにし、より科学的な研究方法の確立を検討する。また、新たな研究方法の確立により、絵文書の研究資料としての価値がどのように高まるかについて考察する。

【会場】：専修大学神田キャンパス 5 号館 542 教室

【主催】：古代アメリカ学会

【連絡先】：

・ 東日本部会幹事・福原弘識（非常勤講師） hironorifukuhara@gmail.com

・ 古代アメリカ学会事務局 jssaa*sa.rwx.jp

（上記アドレスの*を@に換えて下さい）